

オホーツクの風

平成22年4月6日(火) 創刊号

発行所
北見赤十字病院の
明日を考え支援する会
事務局
北見市緑ヶ丘1-10-16
Tel 0157-61-0684

日赤の現状を知る

支援の一步をふみだす

北見赤十字病院の明日を考え支援する会・略称日赤を考え支援する会以下当会といいますが、当会が発足して3ヶ月が過ぎようとしています。その間役員が中心になり当会の運営について試行錯誤の議論を重ね、当面の課題を支援する北見赤十字病院(以下北見日赤と言います)の現状を知ることによって認識が一致しました。

同時に道内の公立病院の決算も調べています。あと2ヶ月もすると(1)一般会計、平成21年度歳入歳出決算(収支計算書)(2)医療施設特別会計、平成21年度歳入歳出決算(損益計算書)が発表になります。正式な読み解きはこの資料で行う予定です。

わる地方交付税措置などの勉強からはじめています。どこまでまとめきれんかわかりませんが、皆で頑張っているところですよ。

を指します。医師、看護師、コメディカルの医療スタッフにどんなエールを送る事が出来るのか、日赤と街のお医者さんと地域住民がどんな連携を出来るのか。北見日赤への医師の招致などまちづくりの面からどんな支援が出来るかなど患者であり市民である私たち会員に課せられた課題は大きいのですが、構想は大きく、着手は小さな小さな一歩からと受けとめて、その一歩を踏み出したところですよ。

会からの伝言

「北見赤十字病院の明日を考え支援する会」は発足総会を平成22年1月29日午後6時30分より市民会館で開催し、今年度(平成22年度)の役員を選出しました。

代表 谷川勝男 副代表 逢坂信治、森實和美 理事 荒田悠、表宏樹、菅野幸子、齋藤高明、松岡清子(五十音順) 事務局長 阿久津俊子 会計 庄司春江 会計監査 阿部治夫

創刊号によせて

代表 谷川 勝男

毎月第二火曜日に定例の役員会が開催され、この打ち合わせには北見日赤の総務課長さんにご足労を戴き、勉強を続けています。

一般的に法人・団体のことを知るには決算書だといわれます。北見日赤を知るには決算書を読み解くことです。現在は平成20年度の資料を基に作業を進め



オホーツクのロマンに誘う流水ノロッコ号(写真:逢坂信治)

読書グループ「木よりの会」が始まったのは五十年前、北斗高校文芸部の現役OBが一堂に会してガリ版刷り「裸心の会」をつくりはじめたのも同じ頃、仲間の一人に長野県佐久病院の若月俊一先生にあこがれて保健婦になった女性がいました。

くり返し語っていた彼女の熱い思いを、今、思い返しています。現在、老人医療費が全国一安く、住民の五割以上が在宅死を迎えられるのが長野県、すべて地域医療の確立を目指した若月俊一先生のお仕事があつてのことです。

「支援する会」の小さな、あまりに小さな旗のむこうに夢見るのは、北見赤十字病院が、道東の佐久病院として「予防医学」をにない、住民の「生」と「死」をケアする大きな旗を振って下さることです。この「オホーツクの風」が、心ある人々にとどくことを願っています。

私と日赤病院 「頑張って!!」に励まされ

阿部 治夫 会員

わが家の居間に、日やけて少々変色した二枚の色紙が掛けてある。今から十五年前、突然呼吸不全で日赤病院に入院、九死に一生を得て退院したとき記念に書いてもらった寄せ書きである。

一枚は、生死の境を彷徨った時懸命に励ましてくれた救命救急センターのナースの皆さんのもの、あとの一枚は人工呼吸器を使う訓練をしてくれた西病棟五階のナースの皆さんのものである。色紙には、入院中に読んで感銘をうけた遠藤周作の小説の一節。無駄もなく区別も差別もない公平さが看護の原則である。そして行った看護は親切に優しく。実際に注射・採血・笑顔・愛情のこもった様々な行為を全身で表現。それらをひたすらやり続ける。最後に「頑張っ

てね」とつけ加えるのを忘れない」という名言に、ナースの皆さんが激励の言葉を添えて署名をしている。

あれは阪神淡路大震災発生の一ヶ月程前から、風邪をひき最寄のクリニックに通院していた。その頃から夜明けごろになると、苦しさで動悸に目が覚める日々が続いていた。震災の二日前、何時ものように悪寒と息苦しさが目覚め居間で呼吸を整えていると、咳といつしよに突然熱いものが込みあげ吐血してしまった。初めてのことなので驚きのあまり茫然としていると、早く病院に」という妻の叫ぶ声でわれに返った。

一刻も早く病院へとの思いで、救急車やハイヤーを呼ぶ時間を惜しみマイカーを走らせて日赤病院の救急救命センターに向かった。夜間待合室には、祭日の早朝にもかかわらず診察の順番がくるのを待つていた。医師の診察の順番がくるのを長く感じながら、睡魔と闘った。ようやく自分の診察が始まって数分後、医師がただならぬ様子で緊急入院の必要を指示した。医師は、「呼吸不全による低酸素血症と高二酸化炭素血症の疑いがあり一刻の余裕もない状態である」と告げられた。

医師の説明によると呼吸不全に陥った患者は、低酸素血症や高二酸化炭素血症を発症し、種々の臓器障害をまねき生命が危険に陥っている。

集中治療室に移し二十四時間体制の治療をする。

酸素吸入の使用は避けて、人工呼吸器を使用する。

人工呼吸器は、適正量の換気に配慮する。

意識を回復したのは、あの阪神大震災直後の一月十七日午前九時頃であった。二日間全く記憶を失ったまま、救命救急センターのベッドに横たわっていたことになる。

暗くて長いトンネルをものがき苦しみながら、やっと明るいところ

にたどり着き目が覚めた。ここは何処なのか、いま何をされているのか、見当もつかないままに、ぼんやりと部屋の中を目で追った。少しずつ意識が回復するにしたがい室内の様子がはつきりしてきた。大きな病室には何台ものベッドが並び、数人のナースが緊張した面持ちで忙しく立ち働いていた。

壁側の高いところに備えてあるテレビが目に入った。ただならぬ画像が映っていた。ビルや高速道路の橋脚などが延々と無残に破壊され、未だかつて見たことのない惨状である。関東大震災が東京大空襲の戦災跡のような惨状である。阪神淡路大震災発生時の映像であった。

ベッド上の自分自身に目をむけると、全身に酸素・点滴・心電図・排尿等のコードやパイプがつながれ、まるで宇宙飛行士が針ねずみのような情けない姿で横たわっていた。後日、

医師の説明によると呼吸不全に陥った患者は、低酸素血症や高二酸化炭素血症を発症し、種々の臓器障害をまねき生命が危険に陥っている。

適切な判断の上、スビーディーな処置を施してくれた担当ドクター、文字通りの献身と「頑張って」の励ましのナースの叫びは、今も脳裏を離れない。幸いに危機一髪のところで一命を取りとめた。

この日から妻と人工呼吸器を伴侶にして、私の第二の人生は始まった。

そして古希もすぎ、あれから十五年の歳月が流れた。

今は、年齢を重ねることの面白さを満喫している。毎月一度は病院に通い、内科や耳鼻科の医師、医療技師等多くの皆さんの笑顔と親切に励まされて職業生活、家庭生活の日々を送っている。

皆さん有難うございました。

3月中頃の夕方、谷川代表から電話があり、当会の事務局長が救急で北見日赤に入院したとの知らせです。

については事務局長に替わって会報作りの部分を引き受けて欲しいとの事です。会報作りは初めて、さ大変。

DTPソフトは「朝刊太郎」を使う事にしました。

春まだ遅いオホーツクの美しい風景に臨時列車を取り込もうと、小清水町止別の丘陵から俯瞰で撮影した。それが一面の写真です。

第2面は阿部会員の記事で上手く収まりました、ありがとうございます。

事務局長兼「オホーツクの風」編集局長が元気で退院する日を心待ちにしております。

次回からは北見日赤の入院体験を基に局長らしい紙面創りになると思います。

ご期待下さい。

(逢坂記)

編集後記

（2）2010年（平成22）年4月6日（火）機関紙

オホーツクの風

第0001号

発行責任者

谷川勝男

（逢坂記）